第3回 小樽港長期構想検討委員会　意見概要

分　野		主　要　意　見
総合的視点	総合的視点	港運事業者として関心のある、穀物基地の形成や対岸貿易の拠点、老朽化対策や耐震強化岸壁の整備等の施策や、物流と観光とのゾーニングについても反映されている。
		船舶の大型化への対応や物流を効率化するための整備などを総合的に進めていくことは、ポートセールスをするうえでアピールでき、港の評価が高まり、港の賑わいも戻ってくると思う。
		東京からニセコへ本社を移すなどの田園回帰の動きがある。観光だけでなく、物流面においても小樽は札幌だけでなく後志を背後圏として見ていく必要がある。
	まちづくりとの連携	背後のまちづくりと一体的に考え、港側とまちづくりとの相互の連携関係が見えるものがあるとよい。
物流・産業	物流全般	石狩湾新港との連携や役割分担を図りつつ、小樽港における物流機能の集約化等で使い勝手の良さで勝負できる港づくりを進め、ポートセールスにつながる取り組みを行っていくことが大切である。
		比較的自然災害の少ない天然の良港という利点を生かした物流機能の強化についても非常に重要である。
		施設の老朽化が進むとともに、労働力が減ってきている。今後も大型船の入港を維持していくために、老朽化対策などのハードだけでなく、ソフト面での「港湾力」の確保、成長も必要ではないか。
	対岸貿易	北海道の人口は減少予測となっており、企業は道外・海外へ販路を見出していく可能性が高い。北東アジア、特にロシア貿易の拠点として、小樽港の発展要素である貨物の集約や港湾施設の再編を行い、地方創生に寄与してほしい。
		ロシア船の集約化は、CIQの面でも効率化につながる。
	水産基盤	食の安心・安全を届けるためにも、高島地区に衛生管理型の施設整備を行う計画を打ち出すことは非常に良いと考える。
観光・交流	クルーズ船	クルーズ船については、コロナウイルスの終息を見据え、クルーズ船誘致や受入施設整備を行うとともに、積丹やニセコなど小樽周辺の魅力をしっかり発信し続けることが必要である。
		第3号ふ頭の整備や駅とのアクセスなど賑わい空間の創出に努め、人流の促進を図れば、日本有数のクルーズ港となり、経済の活性化も期待できる。
		第3号ふ頭のクルーズターミナル化はCIQの面でも利便性の向上に寄与される。
	マリンレジャー	小樽港マリーナは、道内でもレジャーボート基地としての規模を持っているが、整備から30年が経過しており、スーパーヨットの想定はしていなかった。ハード・ソフトともにこの構想を具体化し、小樽が世界から評価される取組みを実行して欲しい。
	賑わい・交流空間	小樽港は、全国的にも歴史的や景観的の価値が非常に高い港であり、その資産価値を十分に生かした港づくりを念頭に置くべき。
		今までの見る観光から、これからは学び楽しむ観光に代わるのではないか。小樽は歴史の中に様々な文化があり、色々な回遊の構成ができると思う。小樽の歴史や港の歴史、産業などが発信できる場所をつくり、市民や道民といった身近な人たちへのアピールが必要である。
安全・安心	防災拠点	防災拠点として、耐震強化岸壁が整備され、大規模災害時の物流の発信基地、災害発生時の支援、物資を受け入れる港として期待する。
		災害リスクが低い小樽港であるが、他地域のバックアップという観点もあるので、改めて防災にも目を向けて取りまとめを進めて欲しい。
	老朽化対策	老朽化施設の更新は急務であると同時に、点在している施設の集約化も進める必要がある。
	安全・安心な港湾空間	港内を航行する大型船、小型船の動線まで配慮した構想となっている。
		老朽化対策とともに防波堤整備を進め、静穏度が確保され、出入港がスムーズな使い勝手の良い港を希望する。